

6 災害調査 課題名 夜越山スキー場雪崩調査 (2006. 2. 19)

研究代表者	雪氷防災：佐藤威	実施期間	平成17年度
研究参加者	雪氷防災：望月重人		

〔目的〕

2006年2月15日夜から16日朝にかけて、青森県平内町の夜越山スキー場ゲレンデ中腹の斜面において、頂上から30~40mの地点から幅約50m、長さ50mの全層雪崩が発生し、リフト中間地点にある小屋まで押し寄せた。これにより、リフト用の照明柱一本が倒れたが、けが人はなかった。(東奥日報、2月17日朝刊による)。本調査の目的は、雪崩発生後の堆積調査および積雪観測によって、雪崩の特徴の把握及び発生原因の推定を行い、今後の災害防止に資することである。

〔実施内容〕

2006年2月19日に現地調査を実施した。発生時から調査時の間に新たな降雪があったため、地肌は隠れて見えなかったが、雪崩の範囲は目視で確認できた(写真1)。150mほど離れたゲレンデ脇の斜面において積雪断面観測を行った。測定項目は、雪質、雪温、含水率(目視)、積雪相当水量である。また、雪崩跡の測量を行った。

〔成果と効果〕

断面観測の結果を図1に示した。積雪深(鉛直方向に測定)は100cmで、表層は新雪及びしまり雪であったが、92cm以下は一部氷板やしまり雪層があるもののざらめ雪が大半を占めていた。雪温は、表層付近の薄い層で0℃以下であったのを除いたほかはすべて0℃であった。目視で求めた含水率は「ぬれている」が多かったが、特に、最下層には非常にぬれている低密度のざらめ雪であった。アメダス(青森)の記録によると、2月14日から15日にかけて気温が上昇して最高気温が9.1℃まで達し融雪が進行したのに加え、8mmの雨が降ったことで、積雪のざらめ化と湿潤化が進み傾斜角が30~35°の斜面において全層雪崩が発生したものと考えられる。

〔所外共同研究〕

なし



写真1 新雪が積もった雪崩の跡

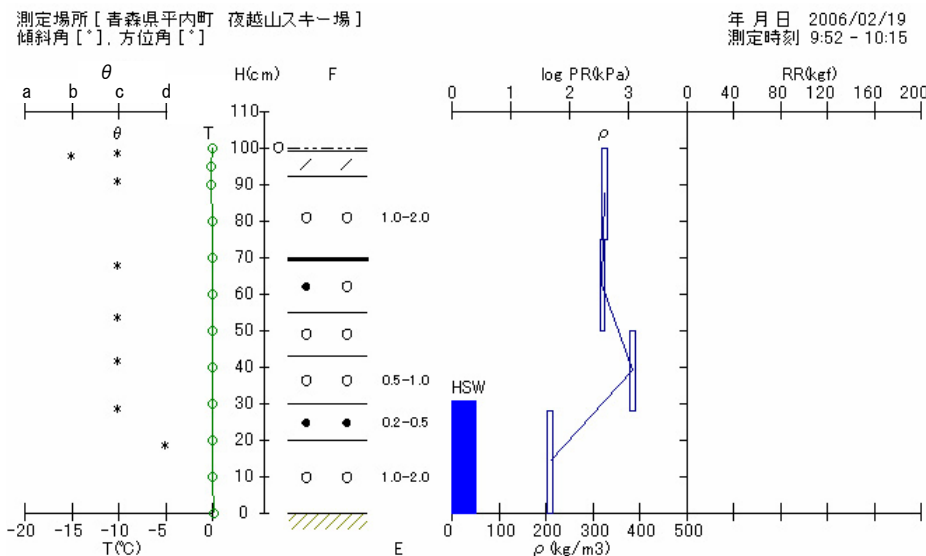


図1 断面観測結果  
ただし含水率θは、  
a：乾燥、b：湿っている、  
c：ぬれている、  
d：非常にぬれている